The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Development of Selected Stories from the Pancatantra/Kalilah wa Dimnah : Genealogical Problems Reconsidered on the Basis of Sanskrit and Semitic Texts
Author(s)	岩瀬, 由佳
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58744
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	岩　瀬　由　佳
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　1　号
学位授与年月日	平成１２年３月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	Development of Selected Stories from the Pancatantra/Kalilah wa Dimnah: Genealogical Problems Reconsidered on the Basis of Sanskrit and Semitic Texts
論文審査委員	主　査　教　授　高　階　美　行
	副　査　教　授　岡　崎　正　孝
	副　査　教　授　森　　茂　男
	副　査　助教授　高　橋　　明
	副　査　教　授　古　賀　勝　郎

論文の内容要旨

インドの説話集として知られる『パンチャタントラ』は、アラビア語版『カリーラとディムナ』を通して世界の説話文学に多大な影響を及ぼしてきたのだが、長く研究の対象として扱われている。Franklin Edgerton、Johannes Hertel、Ruprecht Geib らの学者は『パンチャタントラ』版の内部関係を解明しようと試みてきたが、『パンチャタントラ』の系譜問題については意見の一致はほとんど見られない。本研究は、失われたパフラヴィー版をもととするセム諸語版に特別な関心を払いつつ、『パンチャタントラ』／『カリーラとディムナ』に含まれる５つの挿話を調べることにより—すでに他で論じた３話についての研究成果をも含め—、『パンチャタントラ』版のうち現存するほとんどの版の内部関係を調べるものである。また、サンスクリットやパーリ語で書かれた『パンチャタントラ』以外の説話集や口承伝承された民話なども、あればオリジナルな特徴やテクストの発展を探る際に利用している。

本研究で用いた方法は、『パンチャタントラ』／『カリーラとディムナ』に含まれるある挿話について、それを含むアラビア語、シリア語、ヘブライ語、サンスクリットで書かれた現存する版及びサンスクリットやパーリ語で書かれた他の説話集を調べ、比較研究するものである。その際、各挿話のプロット及び導入詩節を調べ、導入詩節とそれに続く挿話がどのように影響しあい、また各テクストが互いにどのような関係にあるかを示し、『パンチャタントラ』及びパフラヴィー版のオリジナルな姿を探る。

第１章では、『パンチャタントラ』第１巻の中でダマナカが物語る「ライオンと野兎」の発展を論じている。導入詩節の読みに関しては、『タントラーキャーイカ』はいくつか他の版とは異なる読みを示しているが、同一半詩節内の *pāda* 間の母音連続は可能であることと、この挿話のコンテクストにおけるライオンの属性等を考慮し、『タントラーキャーイカ』の読みがオリジナルであるという結論に達した。登場人物の名前については、エジャトンの推論とは逆に、ライオンはオリジナルな『パンチャタントラ』においては名前を持たず、後代のテクストに見られる名前のほとんどがもともとは叙述的実詞だったのが名前へと発展したと結論づけた。プロットについては、ライオンと野兎の性格描写 及び野兎

の策略に関し各版の間に相違が認められる。前者では、ライオンと野兎がそれぞれ相対する性質を備えているという理解が性格描写の発展に影響している。野兎の数の増加とライバルのライオンによる誹謗は、いずれもライオンの怒りを増すのに効果的である。これはGeibの指摘する、『タントラーキャーイカ』に見られるオリジナルな二義性を理解しなかったために発展したものと考えられるが、結果として同様の効果を出している。

第２章では、『パンチャタントラ』第１巻の中で牛が物語る「ライオンの従者たちとらくだ」の発展を論じている。サンスクリットのパンチャタントラ版とパフラヴィー系諸版との間に、寓意において相違が見られるが、話の前後の文脈を吟味すれば、パフラヴィー系諸版にみられる寓意はサンスクリット版よりオリジナルに近いと思われる。サンスクリット版における寓意の逸脱は、導入詩節の伝承過程で書き違えが起こったことによるものと推測した。登場人物の名前については、エジャトンがらくだの名前を *kathanaka* であると推定しているのに対し、この話においてはライオンを含めたどの登場人物も名前をもたないと結論づけた。また、プロットに関して、従者たちがライオンに狩りを命ぜられた後にらくだへ謀略を企てるくだりのプロットの進行は『タントラーキャーイカ』がもっともオリジナルに近いという結論に達した。また、ジャイナ系の２版は、ライオンへの進言者を烏ではなくジャッカルとしている点が特徴的である。『タントラーキャーイカ』や『南伝パンチャタントラ』で、ライオンに自分の体を進呈する者を却下するがライオン自身である一方、ジャイナ系の２版及びパフラヴィー系諸版では他の従者たちであり、類似を示している。

第３章では、『パンチャタントラ』第１巻の中でカラタカが物語る「悪者と正直者」の発展を論じた。『パンチャタントラ』における導入詩節の傾向と写本に使われる文字の特性を考慮することにより、オリジナルな導入詩節では、*pāda* d 末尾の読みは *samam* である可能性があること、またそれ以外は『タントラーキャーイカ』のものと一致するという結論に達した。導入詩節をこのように再構成することにより、「悪者と正直者」のサンスクリットのパンチャタントラ版における寓意は、賢さの度を過ぎた者は愚か者同様非難されるものである、というものと理解される。一方、アラビア語版にみられる寓意をはイスラームにおける策略の見方に一致する。この話の２人の主要登場人物の名前が問題となっていたが、混乱は明らかに、物語冒頭部分の２つの実詞を固有名詞と理解し、それらを導入詩節前半の２つの実詞と同一視することに端を発している。オリジナルな『パンチャタントラ』ではむしろ２人は名前は与えられなかったのであるが、後に彼らのエピセットが固有名詞として理解されるようになったと推測した。

第４章では、『パンチャタントラ』では「悪者と正直者」の直後に物語られる「鉄を食う鼠」の発展を論じた。オリジナルな『パンチャタントラ』における寓意は、『タントラーキャーイカ』、『パンチャーキャーナカ』及び南伝パンチャタントラと同様であるという結論に達した。他の版は、この幾分明確でない寓意を落としてしまうか、より自然な寓意に変えるかしている。パフラヴィー系諸版は、挿話内の、カリーラによる挿話の導入相当部分について一致せず、パフラヴィー版におけるオリジナルな姿を想定することは困難であるが、この部分が挿話の前のカリーラによる挿話の導入部分とは異なる文言を呈していたと思われる。これは、『タントラーキャーイカ』及び『南伝パンチャタントラ』におけ

るが如く、オリジナルな『パンチャタントラ』では挿話内の相当部分が散文で書かれていたことに起因すると考えられる。導入詩節については、韻律及びサンスクリット語における単数の用法を考慮した結果、オリジナルな『パンチャタントラの読みは『タントラーキャーイカ』のものと一致するという結論に達した。２人の主要登場人物の性格描写に関しては、『シュカサプタティ』とジャータカ版を除いては、大きな発展は見られない。パフラヴィー系諸版を含め、パンチャタントラ各版においては、鉄の委託者の旅と預け先の動機づけに工夫が見られる。

第５章では、『パンチャタントラ』では「獲得物の喪失」と題された第４巻（古いシリア語版では第３章、アラビア語版以降では第５章）の枠物語である「猿と鰐」の発展を論じている。導入詩節、プロットいずれについても、現存する版の中では『タントラーキャーイカ』がオリジナルな『パンチャタントラ』に最も近いという結論に達した。また、プロットに関して、『パンチャーキャーナカ』と小本の２つがいかに他のパンチャタントラと異なり、むしろ『パンチャタントラ』以外の説話集に含まれるパラレルに近いかを示した。

第六章において、まずパフラヴィー系諸版に関して、本研究において集めた５つの挿話の発展に関する考察を通して集めた資料および修士論文その他で集めた３つの挿話についての資料を提示し、パフラヴィー系諸版の内部関係について、従来の系統樹に修正を試みた。古いシリア語版は比較的サンスクリット諸版に近い言葉遣いを示しているのが特徴的であり、古いヘブライ語版もいくつかの点で古いシリア語版同様に他のセム語諸版とは異なった文言を示し、サンスクリット諸般との類似点をもつことを明らかにした。次に、『パンチャタントラ』版の系譜を論じる際に活用されうる資料を同様に提示し、Hertel と Geib が提唱したK、xなどの祖型の妥当性について論じた。また、彼らの系統樹では説明のつかない点をいくつか示し、修正の可能性のあることを示した。

挿話を個々に調べた結果、文言においても、プロットにおいても、『タントラーキャーイカ』が最も古い姿を保持していることを改めて示すことができたと思う。南伝パンチャタントラは加筆の少ない点で信頼できるが、『タントラーキャーイカ』が難読部分を保持しているのに対し、『南伝パンチャタントラ』は比較的自由に文言を変えている。パフラヴィー系諸版に関しては、セム諸語版は一方で時に『タントラーキャーイカ』でさえ失ったオリジナルな内容を保持し、また一方では『パンチャーキャーナカ』と小本との類似を示していることがわかった。このことにより、失われたパフラヴィー版が今まで言われてきたように小本より下位に位置するのではなく、むしろ上位に位置するべきであること、また『タントラーキャーイカ』と恐らく同じくらい古いであろうことを指摘した。

論文審査の結果の要旨

岩瀬氏による標記博士論文審査委員会は、所定の手続きにより審査を行い、その内容を以下の要旨として報告する。これは、各審査委員による審査報告を主査がとりまとめ、委員の確認を経たものである。

標記論文は、インド説話文学「パンチャタントラ」中の挿話について、サンスクリット語とパーリ語系の諸版、および、セム語系の諸版の原典資料を用いて比較検討を行い、「パンチャタントラ」とそれの失われたパフラヴィー版の祖形を探ることにより、系統問題解決への寄与をめざして詳細な論証を試みたものである。

その論証はきわめて実証的で、まず膨大な先行研究を丁寧に消化した上で、ほぼあらゆる原典テキストを新たに読解して平明な翻訳を付すとともに、各挿話プロットと導入詩節の精緻な分析を行うことにより、系統問題解決へのあらゆる手がかりを探り出すというものである。

本論文が提示する研究上の貢献は、主として二点ある。一つは、論証の視野と方法である。従来はサンスクリット語系とセム語系の両分野を単一研究者が原典研究することは不可能として避けられてきたが、長年月の研鑽によりこれを可能とし、原テキスト理解者のみが可能な字句の詳細な分析を展開した。この点で、今後本論文に反証を試みる者は同等の視野と力量を求められることになろう。

第二は、研究によって得られた系統問題に関する成果である。タントラーキャーイカがもっとも古い姿をとどめているとの立場から、従来の系統樹の修正を提案した。中でも、この系統樹におけるセム語系諸版の位置付けを明確にした点は、強調されるべきである。パフラヴィー系の諸版が単一の起源を持つのではないとの立場は、単にパフラヴィー系諸版の内部関係の解明にとどまらず、パンチャタントラ成立史の研究にも大きく貢献する。

相互に異なる文化的宗教的背景に精通することにより原典解釈がさらに精緻なものとなりうる箇所も指摘されるが、本論文は総じて、パンチャタントラ系統問題の研究史にきわめて質の高い貢献を行う優れた研究であると評価される。